

オギュスタン・ベルク（1942-）らの言説を題材にした 風景の美しさに関する考察

竹田 直樹¹⁾

A study on the beauty of landscapes based on the discourse of Augustin BERQUE
(1942-) et al.

Naoki TAKEDA¹⁾

【Abstract】

Based on the discourse of Augustin BERQUE et al., I set the following hypothesis.

"The beauty of the landscape is not in the environment but in the interior of the person who sees it. The beauty of the landscape is established by education related to painting and literature, etc. Without such education, the beauty of the landscape is not recognized."

However, when trying to express the beauty of the landscape based on the hypothesis of BERQUE et al., a feeling of incompatibility arises. Apart from the beauty of landscapes established by education, there arises a question as to whether there exists an environment that humans instinctively recognize positively at the genetic level.

Therefore, I present typical cases of landscape which looks beautiful by education according to hypothesis of BERQUE et al., and typical case of environment which looks beautiful at the genetic level. I analyzed each typical case by using the past research.

As a result, the hypothesis of BERQUE et al., is correct if it limits to the beauty of landscape created after the time the concept of landscape was established. But actually while the area of landscape contains an environment that looks beautiful at the genetic level that existed before the time when the concept of landscape was established, the beauty of all landscapes is not said to be attributed to education. In this regard, the hypothesis of BERQUE et al., is wrong.

Key words: Landscape beauty Augustin BERQUE Japan Alps Seto Inland Sea

1. 研究の目的—既往の研究と仮説の設定

風景は、客体視して視覚的に知覚した環境にそれを見る人の内面が生成する主観が融合することにより環境の中に立ち現れるのである。だから、内面がなければ、風景もない。この内面と風景の関係については前報¹⁾においてすでに整理した。

このようにして、風景を認識するようになった人々は、同時に風景を楽しむようになる。もちろん「美しい」風景がその楽しみの主たる対象になる。そして、私たちは、「美しい」

風景に出会ったとき、それに感動しつつ、当然のように風景の「美しさ」は、その環境の中に所在すると考えるのではないのだろうか。風景が「美しく」見えるのは、その環境自体が「美しい」からだと思いはしないだろうか。たとえば、前報で引用したルソーによる1761年に出版された『新エロイズ』の「そこは敏感な心の持主だけに気に入り、その他の人々には怖ろしく見えるような美観に満ちていました」²⁾という一文は、環境の中に「美しさ（美観）」が所在し、その美しさが理解できるかどうかは、見る人の感性の程度によるとルソーあるいはこの一文を語った作中人物のサン＝

1) 兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科／兵庫県立淡路景観園芸学校
Graduate School of Landscape Design and Management, University of Hyogo / Hyogo Prefectural Awaji Landscape Planning & Horticulture Academy

ブルーが考えていることを示している。

だが、これは錯覚であり、実際には風景の「美しさ」は、見る人の主観であり、見る人の内面の中に所在し、環境の中には所在していないという指摘がある。

柄谷行人は、イマヌエル・カント(1724 - 1804)が1790年に出版した『判断力批判』の中で「崇高性は自然の事物のうちあるのではなくて、我々の心意識のうちのみ宿るのである」としていることを指摘する。³⁾ また、サイモン・シャーマは、『風景と記憶』の中で、画家のルネ・マグリット(1898 - 1967)の「それは単にわれわれが内部で経験するものの心的表象でしかないのに、われわれはそれをあたかもわれわれの外部にあるかのように見る」という言説を示す。⁴⁾

そして、オギュスタン・ベルクは、この錯覚に関連して次のように述べている。

客体が主体と本質的に無関係のものになるとすると、表象は主体にとって客体を把握する手段にすぎないものとなる。こうした表象の技術によって、近代人は現実をあるがままに客観的に捉えようと信じ込む。こうしてのちに同じ確信から一九、二〇世紀の地理学者の「景観学」が生まれることになる。⁵⁾

つまり、ベルクは、私たちが、現実(環境)をあるがままに客観的にとらえられるという誤解をしているために、風景の中に錯覚が生じると言っている。風景の認識は内面に宿るものだから、主観的な部分が存在し、風景は視覚的かつ客観的にのみとらえられるものではないのだと指摘するベルクは、さらに次のような見解を示す。

われわれが風景を知覚するときには、つねに想像力の世界が介入してくることになる。風景という、主体と客体対象の間の関係の現実においては、主観的なものは必然的に客観的なものと合成され、主体と客体という近代の二分法が有効性を失うのである。⁶⁾

ベルクは、風景の中に生じる錯覚の原因を私たちが風景を認識するときそこに主観が入り込みそれが客観的なもの、つまり環境のビジュアルティと合成されることにあるとする。

さらに、この主観の部分に関連しベルクは次のように述べる。

中国の格言「風景如画」にあるように、われわれが風景を知覚するのは、絵画や詩歌などで教育され、仕込まれた視線によってである。そのような教育がなければ、われわれが知覚するのは、環境にすぎない。(中略)人々は所属する社会環境に応じて、同じ風景を異なる形で知覚する。⁷⁾

以上のベルクによる言説が書かれる半世紀ほど前に、同じようなことを柳田国男(1875 - 1962)は述べている。

単に眼に入る線の屈曲、色彩の濃淡のみを以て風景は説明し難い。之に対する我々の心の動きには、歴史に養われた複雑な色々の力が加はつて居るからである。(中略)彼等(外国人観光客〈筆者注〉)は歴史を知らず又概念に囚はれるといふことが無いから、必ずしも我々と同じやうな風景の見方はして居ない。(中略)我々の好風景の標準は前代の絵画であり、文学であり、しかも往々にして外国のそれであった。⁸⁾

柳田の言説は、随筆と絡まりあう錯綜したものだが、風景の認識に対する考え方はベルクとほぼ一致しているとみてよい。柳田の言説は、ベルクの言説の基層を形成している。また、中村良夫は、特定の社会集団あるいは特定の文化圏で暮らしている人々の間には、ある種のイメージ、たとえば「浄土」とか「桃源郷」あるいは「アルカディア」というような様式化されたイメージが共有されており、風景に対する主観は社会的で集団的なものと指摘する。⁹⁾

本論では、以上の部分に着目したい。そして、ベルクらの言説に基づき、さらにそれを組み合わせて、「風景の美しさは、環境の中にはなく、それを見る人の内面の中にある。風景の美しさは、絵画や文学などに関わる教育により成立し、そのような教育がなければ、風景の美しさは、認識されない」という仮説を設定する。本論ではこれを便宜的にベルクらの仮説と呼ぶ。

2. 研究の位置づけと方法

本論は風景論に関わる研究である。風景論は哲学、美学、地理学、造園学など多様な分野にまたがり研究されてきた。そして、風景論において美しい風景の根拠がどこにあるのかという問題は、つねに大きな問題であり続けてきた。美しい風景の根拠の所在は、一般的には、客体としての環境の中にあるとして論じられることも多いが、通常、風景論では人間という主体にあるとする。人間がある環境を美しいと意味付け、価値付けるのである。次に、それが後天的に教育や文化を通して形成されるものなのか、先天的に遺伝情報として人間の中に内在されるものなのかが問題となる。前者はいわば風景の文化的所産論であり、風景の評価は時代や民族によって異なると考える。ベルクはその代表的論者である。後者は先験的風景論とも呼ばれ、人類が視覚的に好ましくとらえる共通の環境が存在すると考える。その代表的論者の一人がジェイ・アプトン(1919 - 2015)である。この先験的風景論をふまえると、教育によって成立する風景の美しさとは別に、人間が遺伝子レベルで、いわ

ば本能的にポジティブに認識する環境が存在するのではないかという疑問が生じる。

もし、そのような環境が存在するとすれば、風景の美しさの中には、教育的な要素と遺伝子レベルの要素が混在していることになる。そして、人間が遺伝子レベルで、ポジティブに認識する環境が存在する場合、それは美しい風景としてとらえられる可能性もあるわけだが、その場合の美の所在は、環境の中にあるのだろうか、それとも内面の中にあるのだろうか。前報で整理したように内面は18世紀以降に生じたものであるわけだから、少なくとも内面の中にあるものとはいえないが、一方で、環境の中にあるものとも言い切れないだろう。答えは人間の遺伝子の中にあるということなのかもしれないが、人間の遺伝子と環境の関係は、無関係なものともいいきれない。なぜなら、環境の中には、人間の遺伝子と共通する遺伝子をもつ生物が数多く存在するわけだし、そもそも人間の遺伝子は、環境の中から形成されたものであるわけだからだ。

そこで、本論では、バルクらの仮説に沿う、教育により美しく見える風景の典型的な事例と遺伝子レベルで美しく見える環境の典型的な事例をそれぞれ二つずつ提示して、考察を行うことにする。前者の事例は、バルクらの仮説に正しい部分があることを検証することに寄与するものとなる。また、バルクらの仮説は、全ての風景の美しさが、絵画や文学などに関わる教育により成立しているとしているわけだから、後者の事例は最低でも一つを検証できれば、バルクらの仮説に誤りが含まれる可能性を示すことに寄与するものとなる。それぞれの典型的な事例の抽出は、既往の研究を活用する。

前者の教育により美しく見える風景の典型的な事例の抽出は、社会科学的分野の研究を参考にすることになるが、こうした研究は数多く存在する。そこで、本論では、まず、日本における「風景の発見」の原点に位置する、日本アルプスの山岳風景を事例としてピックアップするが、ヨーロッパにおける「風景の発見」の原点に位置するのもヨーロッパアルプスであることから、この事例の検証は重要である。そして、第二の事例は、瀬戸内海の多島海風景とするが、この理由は、ヨーロッパにおいて形成されたエーゲ海の多島海風景に対する価値観の形成が、ヨーロッパアルプスの山岳風景に対する価値観の形成と連続的に生じたものだからである。

後者の遺伝子レベルで美しく見える環境の典型的な事例の抽出は、自然科学的分野の研究を参考にすることになるが、こうした研究はほとんど存在しない。そこで、既存の研究成果の中から、活用可能な研究成果を見出すことができたという理由で、「花のある環境」と「展望する環境」の二つをピックアップすることとした。なお、前述した先験的風景論は、通常、自然科学的な論調を呈するものの直接的な実験や観察を伴うものではない。本研究では、先験的風景論は引用して参考にはするが類推にすぎないものとして論旨の根拠としては用いないこととする。具体的には、遺伝子レ

ベルで美しく見える環境の典型的な事例の抽出は、実験や観察に基づく研究成果を論旨の根拠として活用する。

3. 教育により美しく見える風景の典型的な事例

3.1. 日本アルプスの山岳風景

3.1.1. 前近代の日本アルプス

日本アルプスは、中仙道沿いに位置し、江戸時代の主軸街道を行く多くの人々が目にしてきたはずなのに、その美しさが注目されることはなかった。山岳信仰である修験道の修行者、マタギ、鉱物の採取者である山師などは山に入っていたのだが、いうまでもなくレクリエーションとして登山する人など皆無であり、飛騨山脈、木曾山脈、赤石山脈という名称もけって広く一般に普及していたわけではなく、それらの山々に定まった名称などそれほどなかったのである。これらの山並みはまるで存在しないかのように完全に無視されていた。それは、前近代の文学や美術を見ても明らかなのだ。日本アルプスが詩歌に詠まれたり、絵画のモチーフになることなどありえなかったのである。『万葉集』には、富山から見た立山を詠む短歌が存在するが、当時立山の雪は神の力により消えないのだと考えられており、信仰と関連するものだと考えられる。17世紀に木曾路を通った松尾芭蕉（1644 - 1694）は、『更科紀行』（1689）の中で、日本アルプスに対し、高い山や見慣れる形の峰が頭上におおいかぶさるようにつらなって迫っており、平地が少なく、心おだやかならず、恐ろしい思いのやむ時がなかったと、簡潔に記述している。¹⁰⁾ 芭蕉にとって日本アルプスは美しいものではなく、風致が感じられるものでもなく、ネガティブなどうでもよい環境だったのである。ここで、風致という用語を使用した。風致という概念と風致と風景の関係については、別稿にゆずることとし、ここでは論じない。

3.1.2. 日本アルプスの発見

飛騨山脈、木曾山脈、赤石山脈の3つの山系は、日本で始めて西洋式登山を行ったイギリス人鉱山技師のウィリアム・ゴーランド（1842 - 1922）により、日本アルプスと名づけられた。そして、イギリス人宣教師ウォルター・ウェストン（1861 - 1940）は、1896（明治29）年、『日本アルプスの登山と探検』をイギリスで出版し、「日本アルプスの父」と呼ばれるようになる。

この書籍の中で、日本アルプスはもちろん大きく賞賛されており、それゆえ、欧米で人気が高まり、後に来日した他の欧米人による賞賛がどんどん上積みされていく。こうした、欧米における高い評価が、西欧化による近代化を推進する当時の日本で大いに喜ばれ、明治時代後半から大正時代にかけてのナショナリズムの高まりの中で、日本アルプスの風景は、国内でも評価を確立していくのである。

具体的には、小島烏水(1873-1948)が、1910年(明治43)から1915年(大正4)にかけて出版した全4巻の「日本アルプス」という書籍によって、日本アルプスの風景は、日本の山岳風景を代表する美しい風景としてとらえられるようになる。小島は、その書籍に添えた広告文で、「日本アルプスは日本本州の中央大山系、即ち越後、越中、信濃、飛騨、甲斐、美濃にまたがり、高山深谷、白雪深林などの大自然に富み、最も複雑なる構造と高調の色彩を有すれど、本来人跡殆ど全く到らず、従来の地理文学絵画より、削除せられたる境域なり」¹¹⁾としていることから、日本アルプスという名称もこの書籍により定着したものと考えられる。

日本で日本アルプスの風景が美しいものとされた、重要な背景のひとつは、それを欧米人が美しいと言ったことにある。したがって、なぜ、日本アルプスの風景が美しいのかを探るためには、なぜ、当時の欧米人がそれを美しいとしたのかについて探らねばならないのである。ではあるが、欧米人が日本アルプスを美しいとした理由は簡単で、それは、ヨーロッパのアルプスと似ているからである。そのことは、「日本アルプス」という呼称の中に凝縮されている。したがって、ここでは、なぜ、欧米人がヨーロッパのアルプスを美しいと考えているのかについて探らなければならない。

3.1.3. 異界としての14世紀のアルプス

太古の昔からヨーロッパ人はアルプスを知っていたのだが、それが美しい風景とされるようになったのは18世紀初頭以降のことである。そうであるとするなら、それ以前のヨーロッパ人はアルプスをどのようにとらえていたのだろうか。

瓜田澄夫は、14世紀頃のヨーロッパ人のアルプスに対するイメージについて、「魑魅魍魎の跋扈する『異界』であり、竜に身を変じた『悪魔』が旅人や住民を『誘惑』するところであり、旅人を襲う盗賊や狼の住むところであり、キリスト教の教義が征服したはずのゲルマンの『異教の神々』がいまだ横行し、雌伏し、反撃の機会をうかがっている」¹²⁾と述べている。その証拠に、宗教と無関連な最初の登山をした人であり「登山の父」とされるイタリアの詩人ペトラルカ(1304-1374)による、1336年、フランスのアヴィニョン近郊ヴァントゥ山(1912m)の登山に関わる逸話がある。

瓜田によるとペトラルカは、弟とふたりで登山に成功し、雪に覆われたアルプスを遠望して感動する。おそらくこの時ペトラルカは、後述する遺伝子レベルの要因で展望に感動し、さらには、中世的で霊的な環境の体験をしたのだと思う。しかし、下山後、教父アウグスティヌス(354-430)の『告白』(397年)にある「人々は外に出て、山の高い頂、海の巨大な波浪、河川の広大な流れ、広漠たる海原、星辰の運行などに賛嘆し、自己自身のことはなござりにしている」という一文に出会い、深く自省してしまう。なぜなら、ペトラルカの本能的で霊的な感動は、当時のキリスト教では、容認されないものだったからである。¹³⁾

つまり、中世カトリックの世界では、アルプスのような大自然を見て感動することが宗教的に容認されていなかったのであり、人々は信仰の中でアルプスをネガティブにとらえていた。この傾向はルネサンスを迎えても続き、本来神が創造した地球は完全な球体であったはずなのに、アルプスが聳え、断崖絶壁の深い峡谷があるのは、瓜田によれば「人間が犯した罪を罰するために神が引き起こした『ノアの大洪水』のため」なのだと思われていた。¹⁴⁾したがって、当時、アルプスは人々にとって最悪の眺めのひとつであったのだと考えられる。

3.1.4. 「イボ」や「おでき」としての17世紀のアルプス

しかし、以上のようなカトリシズムに対する批判運動であるプロテスタントイズムが16世紀に始まり、それまでカトリック教会が民衆に説いてきた山岳に対する中世的な迷信性や神秘性は排除されていく。その結果、17世紀には、山岳の物質化が進み、瓜田によると「イギリスでは、アンドルー・マーヴェルやジョン・ダンが描くように、山は単なる地球の表面の醜い『イボ』や『おでき』になって」しまったのである。¹⁵⁾ちなみに、マーヴェル(1621-1678)とダン(1572-1631)はともに17世紀のイギリスで活躍した詩人である。

もちろん17世紀の段階で、アルプスを「イボ」や「おでき」としてとらえていたのは一部の人間だったのかもしれないが、アルプスが一般的にネガティブにとらえられていたのは確かなことなのだと思う。この時期にアルプスを賞賛した人の話は見当たらないのである。相変わらずネガティブな眺めとしてとらえられていたアルプスではあるが、カトリック時代の最悪の眺めからは大きく前進したことに注目しなければならない。つまり、アルプスの眺めは「きわめて悪い眺め」から「かなり悪い眺め」に評価が上がったのである。

この時期には、イタリアとオランダで盛んに風景画が描かれていたのだが、アルプスが画題に選ばれることはほとんどなかった。

3.1.5. 崇高な18世紀のアルプス

18世紀初頭の「風景の発見」が、アルプスをひとつのきっかけとして生じたことはたしかなことであり、それについては、前報で述べたとおりである。イギリス人は、グランドツアーでアルプスに接し、アルプスに広がる厳しい山岳の自然環境と「崇高」という美学上の概念を結びつけた。

「崇高」という概念は、エドモンド・バーク(1729-1797)により1757年に発表された『崇高と美の概念の起原』としてまとめられ、このなかでバークは「崇高」と「美」を区別し、調和や均整、滑らかさ、明るさによって安らぎや快さをもたらす「美」に対して、見るものに畏怖の念を抱かしめる荒寥、不調和、荒々しさ、闇といったものによる感動を「崇高」と呼んだのである。¹⁶⁾アルプスの風景はいうまでもなく後者に相当する。

アルプスは、1761年に出版されフランスで大ベストセラーになったジャン＝ジャック・ルソー（1712 - 1778）の『新エロイズ』の中で賞賛され、¹⁷⁾これをきっかけとして美しい風景に向かって大きく前進を開始する。1786年には、ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749 - 1832）も『イタリア紀行』の中でアルプスを賞賛し、¹⁸⁾その後アルプスは賞賛の嵐に包まれるのである。こうして、アルプスは「きわめて悪い眺め」から「イボ」や「おでき」を経て、「きわめてよい風景」に上り詰めたのだ。

3.1.6. 日本アルプスの風景のメカニズム

風景という概念をまだもちあわせていなかった17世紀以前のヨーロッパ人は、キリスト教の影響もありアルプスをネガティブな環境としてとらえていた。だが、18世紀初頭に、風景という概念が創造されると、それと同時に、アルプスは「崇高」という一種の美意識と融合し、美しい風景としてとらえられるようになった。「崇高」という概念は、人の内面に宿る主観であり、それは、文学や絵画を媒介にしつつ教育的に人々の間に広まり、その教育を受容した人々は、みなアルプスの風景を美しいものとして楽しむようになる。それは凡そ1760年代から1780年代の出来事だった。

前近代の日本においては、日本アルプスは、定まった名称もなく完全に無視されていた。だれもそれを美しいものとして眺めたりはしなかった。だが、明治20年代（1887～96）以降に欧米からもたらされた風景という概念が定着すると、ヨーロッパにあるアルプスの風景というすばらしい風景と似た風景が日本にもあり、それを欧米人がすばらしいと言っているという事実が、書籍などを媒介にしつつ教育的に人々の間に広まった。また、小島のように日本人の中にもその風景の美しさを解説する批評家が現れた。こうした教育を受容した人々は、みな日本アルプスの風景を美しいものとして楽しむようになる。それは凡そ1910年代の出来事だった。

以上のように、日本アルプスの風景は、教育により美しく見える風景の典型的な事例のひとつである。

3.2. 瀬戸内海の多島海風景

3.2.1. 前近代の瀬戸内海

瀬戸内海は、古くから注目されていた。遣唐使や防人など瀬戸内海に行く人々の歌が8世紀の万葉集におさめられ、これらが10世紀の古今和歌集や13世紀の新古今和歌集に影響をもたらす。厳島、下関、淡路島、和歌浦、須磨、屋島など多くの地名が歌枕として定着する。さらには、『平家物語』（1309年以前）や『太平記』（1370年頃）などの物語の流行は、各地に多数の名所を形成し、江戸時代後期には庶民の旅もさかんになっていた。

しかし、西田正憲の研究からも明らかなように、それらは拠点の集合体であり、多島海としての瀬戸内海という総括的な認識は存在せず、各拠点が環境と歴史や物語がセット

となった風致豊かな場所として楽しまれていたのである。西田によると、「瀬戸内海」は、欧米人の用いたThe Inland Seaの翻訳語であり、1868年（明治1）に翻訳され、明治後期に定着したとされている。それまでは、瀬戸内海は複数の灘の羅列でしかなかった。¹⁹⁾

3.2.2. 近代的な瀬戸内海の発見

ドイツ人医師で博物学者のフリッパ・フランツ・フォン・シーボルト（1796 - 1866）は、1826（文政9）年にオランダ商館長の江戸参府に随行し、瀬戸内海を船で往復する。この時の紀行文を、1832年（天保3）から1851年（嘉永4）にかけて20分冊としてドイツで出版した大著『日本』の中に掲載した。

この書籍の中で、瀬戸内海はもちろん大きく賞賛されており、後は前述した日本アルプスの場合と同じような経過をたどることになる。つまり、欧米で瀬戸内海の人気が高まり、後に来日する他の欧米人による賞賛がどんどん上積みされ、こうした、欧米における高い評価が、西欧化による近代化を推進する当時の日本で大いに喜ばれたのである。ただ、瀬戸内海の場合は、日本アルプスの場合と異なり、日本でもともと人気の高い場所であったため、それを欧米人が評価してくれたことは、当然のこととして「まってました」というような具合に喜ばれたようだ。ここでの問題は、瀬戸内海の風景に対する欧米人の観点が、当時の日本人の歌枕名所的な観点とは全く異なっており、日本人は、ここでこれまでとは異なる、近代的な瀬戸内海の風景を発見することになる。

具体的には、西田によると、1984年（明治27）志賀重昂の『日本風景論』、1901年（明治34）田山花袋の『続南船北馬』、1906年（明治39）塚越芳太郎の『瀬戸内海』、1910年（明治43）伊藤銀月の『日本風景新論』などの書籍を媒介にして、須磨、明石、鞆、赤間関等の歌枕や名所旧跡の拠点集合的な認識から、瀬戸内海の穏やかな海や海岸線や島々そのものを広い視野で評価し、多島海としての近代的風景の認識に徐々に移行していったのである。²⁰⁾

日本で瀬戸内海の風景が美しいものとされた、重要な背景のひとつは、古くから風致豊かな拠点が多数存在する場所として親しまれてきた瀬戸内海を欧米人がこれとは異なる観点から美しいと言ったことにある。したがって、なぜ、瀬戸内海の風景が美しいのかを探るためには、なぜ、当時の欧米人がそれを美しいとしたのかについて探らねばならない。

3.2.3. ピクチャレスク

アルプスをきっかけに風景を発見したイギリス人が直面した次の問題は、どのような風景が美しい風景なのかという問題である。1760年代からアルプスの風景は「崇高」な風景として人々に認識されるようになったが、アルプスの他

にも美しい風景は存在するはずだからである。

その答えを出したのが、牧師で旅行家のウィリアム・ギルピン(1724 - 1804)であり、彼が提示した考え方が「ピクチャレスク」なのだ。美しい風景とは「ピクチャレスクな風景」であり、それは「絵のような風景」を意味する。ギルピンは、現実の風景の一部を切り取って、その構図や色彩を絵画に見立てて観賞するという考え方を示した。²¹⁾

ただし、ここに生じる次の問題は、「絵のような風景」が美しい風景なのだとすれば、その絵はどのような絵なのかということだ。これは、きわめて難解な問いだと思うのだが、ギルピンはその答えを明快に示したのである。その答えを用意したのは、実際にはイギリスの資本家やこの時期に形成され始めた大都市に暮らす世界最初の中産階級といえる消費者たちであり、それは、ギルピンによりピクチャレスクが提唱される数十年前から当たり前のように用意されていた。18世紀初頭からイギリスの造園家は、その答えとなる風景画を参考にして風景式庭園を作り始めていたのである。

それらの絵は、17世紀にイタリアで活躍したクロード・ロラン(1600 - 1682)に代表される一連の画家による風景画で、高山宏によれば、この他に、サルヴァトーレ・ローザ(1615 - 1673)やガスパール・プサン(1615 - 1675)がおり、これらと同じようなテイストがあるということで、ヤコブ・ファン・ロイスダール(1628年頃 - 1682)やメインデルト・ホッペマ(1638 - 1709)などオランダ人の画家の絵画も人気があったらしい。²²⁾

高山は、この事態に対し「自然を『再発見』したものの、それをどういう風に見てよいものかまだわからなかった英国人たちが、たまたまそのコードを同時代イタリア風景画のコンポジション(構図)の中に求めたのではないか」としている。²³⁾高山のこの考察は、おそらく的確なものだと思うのだが、美しい風景の基準が、当時、たまたま人気のあった絵画の中に求められたわけである。

だが、ここで重要なのは、「ピクチャレスク」という用語が示すように、ギルピンが風景画を媒介にして、新たな風景の認識を人々に可能にする教育をもたらしたことである。前述したようにベルクは「中国の格言『風景如画』にあるように、われわれが風景を知覚するのは、絵画や詩歌などで教育され、仕込まれた視線によってである。そのような教育がなければ、われわれが知覚するのは、環境にすぎない」としているが、まさにギルピンはここで『風景如画』と宣言したのである。そして、当時、流行していた大衆的な絵画が具体的な教材として機能し、風景の評価に対する基準となったのだ。

これらの絵画は、グランドツアーの土産として、そのオリジナルやコピーが大量に買い付けられイギリス本土に流入していた。特に、ロランには熱狂的な人気があり、当時、イギリス人資産家が争うように買いあさったのであった。

前報で述べたように16世紀と17世紀において、風景は

風景画の中でのみ風景として体験されていた。ギルピンはその構図を逆転したのである。「ピクチャレスク」という教育が、絵画の中に閉じ込められていた風景を美しい風景として現実の環境の中に創造した。

ギルピンは1782年に、『主としてピクチャレスク美に関してワイ川および南ウェールズの幾つかの地形その他の1770年夏になされた観察』を出版し、イギリス国内の風景をピクチャレスクの視点から分析した。²⁴⁾もちろんそこには前述の絵画の影響がある。この書は、実際には、旅行ガイドブックとして機能し、これがきっかけとなって、イギリスでピクチャレスク・ツアーがブームになる。このツアーは、このころフランス革命の影響で、国外旅行がしにくかったこともあり、イギリス国内が主な対象になったが、ようは、上記のような絵画に描かれた風景に似た風景を探訪する旅なのである。

石倉和佳によれば、そこに「自然に対する畏怖の念はなく、自然は『風景』として人々の趣味に取り入れられて」いく。²⁵⁾つまり、アルプスをきっかけにして発見された風景の一般化と拡散が始まったのである。この背景に、産業革命に伴う陸上交通や運河の発達があることも忘れてはならない。石倉によれば、旅行者は、ツアー用の衣装をまとい、スケッチブックと画材、地図、ガイドブックをそろえ、さらにクロード・グラスと呼ばれる風景を絵画のように楕円形の色ガラスに写す小道具も持っていた。²⁶⁾このクロード・グラスは、クロード・ロランからその名称が生じたものなのだが、携帯型に小型化されたカメラ・オブスキュラとともに、この時期爆発的に普及したのである。当時の人々は、まだ、現実の環境の中での風景の認識が不完全で、環境(風景)をクロード・グラスやカメラ・オブスキュラに映して見る必要があったのである。

また、藤田治彦²⁷⁾によれば、人々が実物の風景を見るようになる中で、ヨーロッパの18世紀の風景画は不毛なものとなった。16世紀に始まり17世紀に確立されたばかり風景画は、こうして、はやくも危機を迎えたのである。

3.2.4. ピクチャレスクと瀬戸内海

そして、ピクチャレスクという教育の教材として機能し、風景の評価に対する基準となり、イギリス人に「理想的風景」と呼ばれた、ロランを始めとする17世紀の画家の絵画がどのようなものだったのかということについて説明しなければならない。

まず、二番人気のローザは、ごつごつした岩山の風景を得意とし、それはアルプスやイギリスの湖水地方の風景に結びつくものだと思う。そして、飛びぬけて一番の人気を誇ったロランの絵画には、ヨーロッパの古代神話やキリスト教の『聖書』に題材を求めたものが多い。古代ギリシア風の建物がよく登場し、それらは川辺や海辺に建っている。明らかに島を思わせる作品も多数確認でき、その題名はたとえば、『デロス島のアイネイアスのいる風景』(1672)なのである。(図—1)デロス島とはエーゲ海の島のことであり、エーゲ海



図-1. クロード・ロラン『デロス島のアイネアスがいる風景』（1672年）National Gallery, London（出典）
<http://free-artworks.gatag.net/2013/08/14/070000.html>（2017年9月30日閲覧）

はギリシア語でアーキペラゴと呼ばれ、アーキペラゴとは英語で多島海を意味する。つまり、エーゲ海のような多島海風景は、ピクチャレスクの典型の一つであり、欧米人にとって、それは典型的な美しい風景なのである。

シーボルトは、1826年（文政9）に瀬戸内海をアーキペラゴという用語使って賞賛したのである。『日本』には、次のような描写がある。

この内海の航海を始めて以来、われわれはこれまで日本に滞在していた間で最も楽しみの多い日々を過ごした。船が向きをかえるたびに魅せられるように美しい島々の眺めがあらわれ、島や岩島の間に見えかくれする本州と四国の海岸の景色は驚くばかりで——ある時は緑の畑と黄金色の花咲くアブラナ畑の低い丘に農家や漁村が活気を与え、ある時は切り立った岩壁に滝がかけ、また常緑の森のかなたに大名の城の天守閣がそびえ、その地方を飾るたくさんの神社仏閣が見える。はるかかなたの南と北では山々が天界との境を描いている。隆起したまろい頂の峰、それをもしのぐ錐形の山、ぎざぎざに裂けたような山頂もみえ——峰や谷は雪におおわれている。²⁸⁾

このように、シーボルトの記述の中には、瀬戸内海に行く船上から見える城や社寺仏閣に関する内容が見られるが、それらの建物を古代ギリシア風の建物に置き換えれば、その記述はロランの絵画の解説になってしまう。当時の欧米人にとって瀬戸内海の風景は典型的な「ピクチャレスク」なものであり、それはロランが描くエーゲ海のように美しい風景だったのだ。もちろん、シーボルトはピクチャレスクだけでなく、その後に展開するロマン主義も知っていたわけだから、「ピクチャレスク＝瀬戸内海」という図式が成立するわけではないが、当時の欧米人が瀬戸内海の風景を受容するときピクチャレスクが大きな要素になったのは確かなことなのだ。

西田は16世紀のルイス・フロイス（1532 - 1597）、17世紀のエンゲルベルト・ケンペル（1651 - 1716）などが瀬戸内海を幾度も通過しているのに風景を賞賛した形跡がないことを指摘している。²⁹⁾ 彼らは、まだ、風景もピクチャレスクも知らなかったのである。

3.2.5. 瀬戸内海の風景のメカニズム

18世紀前半のヨーロッパ人は、現実の環境の中に風景を認識するようになっていた。そして、風景を楽しみたいと考えるようになる。とりあえず「崇高」なアルプスの風景は、

十分に楽しめる美しい風景として認識されるようになっていたのだが、その他の風景に対するガイドラインがあいまいだったのである。そこで、当時、イギリスで流行していた大衆的な風景画が注目されるようになる。そこに描かれているような環境が、美しい風景なのではないかと考えられるようになった。イギリスの造園家は、18世紀中頃になると、こうした絵画を参考にして、新たな庭園様式である風形式庭園を作り始めていたのである。そこに、ギルピンが「ピクチャレスク」という概念を提示する。美しい風景とは、絵のような風景だと定義したギルピンは、その絵が具体的にどのような絵で、さらに、それらの絵に似た風景が、イギリス国内のどのような場所にあるのかまでを提示した。そのような中で、ロランが繰り返し描いたエーゲ海の多島海風景は、ピクチャレスクのひとつの典型となった。こうして、ピクチャレスクに関わる教育を受容したヨーロッパ人は、エーゲ海を美しい風景として楽しむようになったのである。それは、18世紀中頃の出来事だった。

そして、エーゲ海の風景を美しいと認識するヨーロッパ人が、来日し瀬戸内海を見た。彼らは、瀬戸内海がエーゲ海に似ていることに気づく。

前近代の日本において瀬戸内海は風致豊かな名所ではあったが、多島海風景としてとらえられるようなことはなかった。だが、明治20年代(1887～96)以降に欧米からもたらされた風景という概念が定着すると、瀬戸内海は、ヨーロッパにあるエーゲ海というすばらしい風景と似た風景であり、それを欧米人がすばらしいと言っているという事実が、書籍などを媒介にしつつ教育的に人々の間に広まった。また、志賀や田山や塚越のように日本人の中にもヨーロッパ人が瀬戸内海の風景を美しいものとする根拠を解説する研究者や文学者が現れた。こうした教育を受容した人々は、みな瀬戸内海の多島海風景を美しいものとして楽しむようになる。それは凡そ1900年代の出来事だった。

以上のように、瀬戸内海の風景は、教育により美しく見える風景の典型的な事例のひとつである。

4. 遺伝子レベルで美しく見える環境

4.1. 花のある環境

4.1.1. 花とクジャクの尾羽

モモやアンズの花が咲き誇る果樹園、様々な園芸植物が植栽された公園、ヤマザクラが作り出すピンクの山、こんな花のある環境は多くの人々に美しく感じられ、今日それらは多くの場合、風景として認識されるものだと思う。花のある風景の美しさについて考えようとするなら、まず、そもそもなぜ花が美しく見えるのかについて考えなければならない。花は、古代エジプト第18王朝のファラオ、ツタンカーメン(紀元前1342 - 24 推定)のミイラとともに発掘されている。ま

た、ネアンデルタール人が死者に花をたむけたという説もあり、この問題は様々に議論されているが、人類の歴史の始まりから人々にとって花は美しい存在だったのかもしれない。

そこで、人がなぜ花を美しく感じるのかという問題を考える前に、クジャクの尾羽がなぜ美しく見えるのかということを考えてみたいと思う。その理由は、数世紀にわたって様々な議論されてきたこの問題に関する研究が、生物学の分野で1980年代以降に著しく進んだからなのだ。そして、その研究史は、長谷川真理子により、1992年に出版された『クジャクの雄はなぜ美しい?』という著作としてすでに総括されている。そこで、以下に、この著作をもとにその要点を整理する。

4.1.2. 長谷川の著作をもとに整理したクジャクの尾羽が美しく見える理由³⁰⁾

クジャクの尾羽はたしかに美しいが、ゴクラクチョウなど他の鳥類、アゲハチョウのような昆虫、グッピーなどの魚類のように、目の覚めるような鮮やかな色彩に包まれ華麗にデザインされた美しい動物は地球上に満ち溢れている。これらは、ヒトがデザインしたものではないのに、高度に計画された巧妙な美しさに包まれている。神の叡智がそれらをデザインしたのだと考えるのはきわめて自然なことだと思う。

しかも、その代表的存在といえるクジャクのように、豪華で過剰な尾羽は、飛ぶのに邪魔で、藪に引っかかりやすく、どうみても生活に不便そうであり、捕食者にも見つけやすく、生存していく上で不利に見えるのである。それは、美術作品と同じように美しさだけが目的なのだとか考えようがないものなのだ。

つまり、クジャクの尾羽は、チャールズ・ダーウィン(1809 - 1882)やアルフレッド・ウォレス(1823 - 1913)により確立された、進化論における自然淘汰の理論によっては説明できないのである。

自然淘汰とは、ダーウィンによって1859年に出版された「種の起源」に書かれた進化を説明するうえでの根幹をなす理論である。生存と繁殖に有利な性質を持った個体が生き延び、より多くの子を残し、逆に不利な性質を持った個体は長生きできず、多くの子供を残せない。つまり、様々な性質をもつ個体が自然環境によって篩い分けられ、進化が生じるという考え方である。そして、クジャクの尾羽は、自然淘汰の対象になるべき存在に見えてしまう。これでは、やっぱり、万物を創造した神が存在するのではないかということになる。

しかし、クジャクに代表される過剰に美しい動物の多くは、美しいのは雄だけで、雌はいたって地味な姿をしている。雌の地味な姿については、ヘレナ・クローニンが、捕食者に目立たないことが生存や繁殖に有利に働くので自然淘汰の観点からそのようなのだとする1870年代から90年代にかけてのウォレスの研究を紹介している。³¹⁾一方、

自然淘汰では説明できない雄の尾羽の美しさについては、その根拠を神以外に求めるとすれば、少なくともそれが性に関係する問題なのかもしれないということはなんとか類推できるところである。

そこで、ダーウィンは自然淘汰と対をなす、もうひとつの進化の原理として性淘汰という理論を1871年に出版した『人間の由来と性選択』の中に提示した。性淘汰は、異性をめぐり闘いを通じてある形質が進化して行く現象である。ひとつの種において、ほとんどの場合、雌の個体数や交尾の機会は雄よりも少ない。それゆえ、交尾をめぐり個体間の争い、多くは雄同士の争いが進化をもたらすというのが性淘汰である。

ダーウィンは、クジャクの尾羽について、雌が「魅力的」だと感じた雄を選び好みするため、そのような雄が増えたのだと考えた。しかし、当時、このダーウィンの説は全く受け入れられなかったのである。その理由は、人間が見て美しいと感じる羽の色などを、動物の雌も同じように美しいと感じていると仮定し、そのような雄を雌が「魅力的」だと思って選び好みするという説明は、擬人的で非科学的だとされたからである。ダーウィンの説明では、クジャクの雌がヒトと同じように審美眼をもった「目利き」であることになってしまう。

しかし、実は、ダーウィンはまだ遺伝子の存在を知らなかったのである。雌が特定の形態を示す雄に反応して交尾する傾向を示す遺伝子、すなわち「選り好み遺伝子」をもつかもたないかという観点からとらえれば、「目利き」の問題を回避して議論が進められるようになる。

そんな観点からロナルド・フィッシャー（1890 - 1962）は1930年に出版した『自然選択の遺伝理論』の中で、ダーウィンの雌による選り好みの説を補強した。フィッシャーは、「魅力的」な雄を選ぶと、その魅力が遺伝的に息子に伝わるので雌にとって適応的なのだと論じたのである。つまり、このランナウェイ説とよばれる説は、クジャクの雌が、尾羽の豪華な雄を選べば、その遺伝子を受け継ぐ息子の尾羽も豪華になり、豪華な尾羽の雄を選ぶ遺伝子をもつ雌にその息子が選ばれるという繰り返し、すなわちランナウェイが生じ、雄の尾羽はどんどん豪華に美しくなるというのである。それは、自然淘汰にふれるまで拡大的、加速的に続くのだ。

このランナウェイ説は、フィッシャーが理論を言い放っただけで数学的モデルも作らず実証実験もしなかったもので、しばらく誰にも注目されなかった。ところが、1982年に数学的モデルにより実証され、さらには1983年にマルテ・アンデルソンによる実験によっても実証された。

アンデルソンの実験は、コクホウジャクという雄が長い尾をもつ鳥を使い、ひとつのグループの尾を短く切り、もうひとつのグループの尾にそれを貼り付け、雌との交尾の状況を観察するというものであった。結果は、いうまでもなく尾の長いグループが競争に勝ったのである。

性選択に関する理論は、ランナウェイ説の他にもハンディ

キャップ説など多様なものがある。だが、とりあえずここではランナウェイ説を採用して、クジャクの尾羽が美しい理由を整理すれば、雌のクジャクは雄の美しい尾羽を好む遺伝子をもっており、この遺伝子は、クジャクが祖先から引き継いだ遺伝子であり、ヒトがクジャクの尾羽を美しいと感じるのもまた同じこの遺伝子が作用していると考えられるのである。

クジャクは眼や胃や心臓などヒトと共通する器官や細胞をきわめて大量にもっており、ヒトとクジャクの間には膨大な遺伝子の共通性がある。尾羽の色彩やデザインに対する反応に関わる遺伝子もその中のひとつなのだ。

つまり、ヒトがクジャクの尾羽を美しいと感じる理由は、ヒトがそのような遺伝子をもっているからなのである。もちろんアゲハチョウやグッピーの場合も同様なのだ。この部分に関わるヒトの美意識は、文化や宗教などとは無関係な本能的なものなのである。

4.1.3. 被子植物の花

さて、クジャクの尾羽の美しさの理由がわかったところで、次に本題である花の美しさへ話を進めたいと思う。

花の美しさについて考える場合、まず着目しなければならないのは、裸子植物と被子植物の関係である。被子植物は、今から1億3000万年ほど前に裸子植物から進化した。色とりどりの様々な大きさや形をした美しい花をつけるのは被子植物であり、イチヨウやマツなど裸子植物の花はあるかないかわからないほど目立たず、面白くもなんともないものが多いのだ。

受粉を風による裸子植物と異なり、被子植物は受粉に昆虫や鳥類を利用し、また種子の周りに果実を作り食べた動物に種子の運搬をさせるという高度な繁殖方法をあみだした。裸子植物は動物とは無関係に進化し成立したが、被子植物は動物との関係性の中で進化し成立したのである。

被子植物が動物を利用するためには、花や果実が昆虫やその他の動物に対し魅力的に目立たなければならない。そこで、被子植物が用いた戦略のひとつが色彩である。その戦略は成功し、色とりどりの花や果実は、それぞれ好都合な動物を集めるようになる。たとえば、アオキ、サンゴジュ、クロガネモチなど赤い実をつける常緑の樹木は、種子を包む果肉に発芽抑制物質が含まれている。これは、鳥に食われた実が消化器官内で果肉を除去され種だけにならなければ発芽しないことを意味している。つまり、これらの植物は、鳥に食われて遠くに運ばれて発芽することにより、同種間の競争を回避し、生育範囲を拡大しようとしているのである。そのために、空からもよく見えるように、年間を通して緑色の自らの葉の色と区別しやすい赤という色彩を採用したのである。

ここで、少し動物の色覚について説明しておく必要があるだろう。哺乳類の多くは色覚をもたず、あっても2色型色覚で、この場合赤から緑にかけての色を見分けられない。中

生代の哺乳類は夜行性のものが多かったので、もともと彼らの祖先の爬虫類にあった色覚が退化し暗視能力が優先されたためだと考えられている。ただし、哺乳類の例外として、ヒト、オランウータン、ニホンザルなどの狭鼻猿類は、3色型色覚を復活させ、多様な色彩を認識できる。鳥類、爬虫類、両生類、昆虫やエビやカニなどの節足動物、魚類は3色型あるいは4色型の色覚をもつものが多く、特に鳥類の色覚は優れている。

色覚をもつ動物が、色彩に反応する遺伝子をもつのは当然のことであり、その中には、ヒトに引き継がれたものもある。今から数百万年ほど前に、地球に現れたヒトも、その遺伝子のために、鳥と同じように森の中でたとえば赤く熟した果実に反応したのである。

ともかく、被子植物は、色覚のあるヒトを含む動物の色彩に反応する遺伝子に着目し、花や果実をカラフルにしたのだということが出来る。正確には、花や果実をうまい具合にカラフルにした種が数多くの子孫を残し、繁殖に成功した。

つまり、ヒトが花を美しいと感じる理由は、クジャクの尾羽が美しく見えるのと同じように、ヒトがそのような遺伝子をもっているからなのである。そして、その遺伝子には、昆虫や鳥などの遺伝子と共通する部分があるはずなのだ。

4.1.4. 花のある環境のメカニズム

花のある環境が美しく感じられる原因のひとつは、ヒトが被子植物の花に反応する遺伝子をもっていることにある。したがって、被子植物の花のある環境はヒトにとって本能的にポジティブに見える環境なのだといえる。

もちろん、花は文化や宗教などとの関連を濃厚にもつものであるから、花のある環境の見え方には文化的あるいは宗教的な性質もある。たとえば、日本における花見の習慣などはその典型的な事例であり、淡いピンクのソメイヨシノが咲き乱れる風景は、かつては、戦争との関係の中で美しい風景としてとらえられたこともある。だが、こうした文化面や宗教面以前の要素として、遺伝子レベルの要素が花のある環境の知覚には存在するのである。

地球上に現れた最初のヒトも花のある環境を見て、それを風景として体験していたわけではないが、魅惑的な眺めとして感動したはずだ。

4.2. 展望する環境

4.2.1. 経済的価値をもつ展望

ここでの「展望する環境」とは、展望台、山や丘などの高台、建築や土木構造物などが形成する高低差を利用して、環境を見晴らした状態を意味し、それらは多くの場合、今日の私たちにとっては風景として認識されるものである。

スカイツリーや通天閣などその都市を代表する塔や、主な超高層ビルの最上階には展望室があり、いつもたくさんの人々が行列を作ってエレベーターの順番待ちをしている。有

料施設も多いから、その場合、展望室から望む風景は有料の風景なのだということになる。また、観光地には、たいして展望施設や展望のポイントがある。ヒトは高い場所に登って展望するのが好きなようだ。分譲マンションでは、通常、間取りが同じでも上層階ほど価格が高く、これは展望をその根拠のひとつとする場合が多い。つまり現代社会において展望は経済的価値をとまなうものでもある。そして、だれもが、展望台や山の頂から見晴るかす風景を眺めてその美しさに感動した経験があるだろう。

ランドスケープアーキテクトのクリストファー・アレクサンダー(1936 -)は、「小高い場所に登り、眼下に広がる自分の世界をじっくり眺めたいという気持ちは、人間の基本的な本能の1つのものである」としている。³²⁾ だが、本当に高いところから展望することが、文化的あるいは社会的な教育に関わる要因ではなく、ヒトの遺伝子レベルの要因により好まれるのだろうか。ここでは、そのメカニズムについて考えてみたい。

4.2.2. ジェイ・アブルトンの『眺望 - 隠れ場理論』

三月もまだ浅いある日曜日のこと、そろそろ復活祭も近づいたので、私たちは高くそびえたブナの森へでかけた。美しく茂った樹々はウィーンの森じゅう探しても、これほどの場所はまたとあるまいと思われるほどだ。やがて私たちは森の中の開けた草地に近づいた。ブナの高いツルツルした幹は、森をふちどるこんもりとしたヒースの藪にかわる。私たちは足どりをゆるめ、これまで以上にあたりをくまなく探した。いよいよ最後のやぶをくぐりぬければ、平らな草地へでる。そこまで来て私たちは、あらゆる野生の動物が、そして動物通やイノシシやヒョウや狩人や動物学者たちが、そうしたときにきつとするように振舞った——つまり、いきなり草地へとびださず、注意深くやぶの中からむこうをうかがったのである。こうすれば、自分の姿をかくしたまま相手の姿を見ることが出来る。それは狩るものにとっても、狩られるものにとっても有利なことなのだ。³³⁾

これは、コンラート・ローレンツ(1903 - 1989)の著書『ソロモンの指輪(動物行動学入門)』の一節である。たしかに、動物や狩猟時代のヒトにとって、自らの姿を隠しつつ、周囲を見渡せる環境は生存していくために有利なポジショニングでありポジティブなものであったと類推できる。このローレンツの一節を手がかりとして、地理学のアブルトンは、ヒトが身を隠しつつ周囲を展望できる環境を本能的に好むのだとする『眺望—隠れ場理論』をその著書『風景の経験』の中で提唱する。³⁴⁾ ただし、『眺望—隠れ場理論』は、科学的に検証されたものではない。

そして、アブルトンのこの考え方を引用しつつ、樋口忠彦は、「自分たちの住む土地をよく知り、愛するためにも、また高いところに登って自分たちの棲む土地を見おろしたいという人

間の本性的ともいえる欲求を満たすためにも、だれもが気軽に登れる『国見山』型景観を町や村ごとに身近につくりだしていく必要があるように思う」と述べている。³⁵⁾

4.2.3. サルの展望

以上に基づいて考えるなら、イノシシやヒョウが茂みの中から草原へ視線を向けたときの感覚が、今日、私たちが超高層ビルの展望室から展望したときの感覚の深層に遺伝的レベルで横たわっていることになる。それでは、逆にイノシシやヒョウが超高層ビルの展望室からの展望を楽しめるのかというところにわかにはそうは思えない。そもそも、ヒトとその他の哺乳類では、視覚の性質が異なっている。動物がどのように外界を見ているのかという問題は、意外と研究が進んでいないのだが、爬虫類からの進化の過程で夜行性を選択した哺乳類は、一般的に色覚が弱く、前述したようにヒトと同じ3色型色覚をもつのはオランウータンやニホンザルなどの狭鼻猿類に限られる。また、テンプル・グランディンは、一例としてイヌの視覚について、犬種により異なるとしながらも、強い近視であり無限遠は見えないとし、また、一般的に被食動物は、目が離れてついており、視野は広いが、正面中央に一部死角があり、立体視も不完全とする。³⁶⁾ これでは、これらの哺乳類は展望できるとしてもヒトの展望とはかなり異なる展望となりそうだ。少なくともヒトがイノシシやヒョウと共通する遺伝子によって、展望を好むのだとは考えにくい。

それでは、ヒトとほぼ同じ視覚をもつと考えられているサルの展望とはどのようなものなのだろうか。伊谷純一郎は、野生のチンパンジーを観察し次のように述べている。

四時四四分に、サカマの木の上に、チャウシクとンディロが登っているのを見つけた。二頭とも意外に落ち着いていた。遠くをじっと見つめていたが、サトウキビを口にいっぱいほおぼっていた。(中略)チャウシクとンディロは、黙ってカシハのほうを見ながらサカマの木の上において、五時三一分に北の山に去って行った。³⁷⁾

2頭のチンパンジーは、木の上に登りサトウキビを食べながら、遠方(カシハ谷の方向)を47分間じっと見ていたのである。このとき、チャウシクとンディロが展望を楽しみながら食事をしていたのかどうかはわからないが、彼らが展望していたように見えたのは確かな事実なのであり、少なくともサルは展望することが不快ではないと考えて差し支えないと思う。さらに、伊谷は野生のニホンザルを観察し次のように述べている。

見張りのサルは、大きなオスで、昨日とおなじ尾根の上で、アケビの蔓を楯にして監視をつづけた。ときどき姿が見えなくなるが、10メートルばかり離れたところで、また顔を出す。³⁸⁾

伊谷によれば、ここでの見張りのサルとは群れの代表であり指揮者なのだという事だ。このサルは、アケビの蔓にローレンツのいうように身を隠して外敵の接近を監視しているのであって、そのついでに展望を楽しんでいるかどうかは定かではない。だが、少なくともここで尾根の上に登り展望を独占しているのは群れの代表という地位によるものなのだとはいえる。わかりやすくいうとこのサルは「お山の大将」状態なのである。ちなみに、「お山の大将」という用語は、数人の子供が、低い丘や塚など、少し高い場所に競って登り、頂上に登った者が「お山の大将おれ一人」と叫びながら、あとから来るものを突き落とそうとする遊びを意味する。

外敵の接近を監視するために見張りを行うのはサルに限ったことではなく他の動物もすることなのだが、宮地伝三郎によれば、高い場所にわざわざ登って行くところにサルの特徴があるということだ。³⁹⁾ そのことは、動物園におけるサルの展示施設に見られる、サル山に明確に反映されている。

また、ウィリアム・マックグルーは、ヒトとチンパンジーの狩猟を比較して次のように述べている。

どちらの種でも、視覚、聴覚、嗅覚の手がかりもとに獲物を探す。どちらの種も高いところに登って目で獲物を探す、といった〈戦術〉をもっているが、チンパンジーが探索のために〈戦略〉を用いているかどうか、はっきりしない。⁴⁰⁾

つまり、ヒトとチンパンジーはともに、高いところに登って聴覚や嗅覚ではなく視覚によって、獲物を探すのである。このことは、ヒトとチンパンジーが、生きていくために高いところに登って展望したいという欲求をもっている可能性を暗示する。

4.2.4. 展望する環境のメカニズム

以上のような観察結果や言説から、霊長類は高いところに登って展望することを好む性質を持っている可能性があると言ってよいのではないのだろうか。私たちは高いところに登って展望することを快く感じるわけだが、その感覚が遺伝子レベルのものである可能性はかなり高いと思う。言葉も火も使わない私たちの祖先は、空腹の中、高い場所に登り展望することにより獲物を見つけ、幸福な衝動に包まれていた可能性がある。その時の幸福な衝動が展望する環境の美しさと結びついてしまったのかもしれない。そのため、私たちは展望台を見つけると登ってしまうのではないのだろうか。

5. まとめ

ここでは、遺伝子レベルで美しく見える環境として、「花のある環境」と「展望する環境」の二つの事例を示したが、これら以外にも同様の環境は存在すると予想される。

科学的な検証を伴うものではないが、アプトンは、ヒトが遺伝子レベルでポジティブに見える環境は、ヒトの棲息に適した条件が備えられた環境であり、そのことをヒトが直感的に読み取ることができる場合であるとしている。⁴²⁾たとえば、飲料水が得られる川や泉があり、その周りに食糧となり得る植物が生育し動物が群れる環境などはその典型だろう。農地の広がる環境もそのようなもののひとつなのかもしれない。

このように、人々が風景という概念を獲得する以前から、ヒトが遺伝子レベルで美しく見える環境は存在したのである。前近代において、それは風景ではなかったが、たとえば花が咲き乱れる草原や小高い丘の上からの展望に、ヒトは感動していたはずだ。

しかし、近代化の中で人々が風景という概念を獲得すると、その風景という概念は、環境の中に無数の美しさを形成するようになる。もちろんその美しさは環境の中にはなく、それを見つめる人の内面の中にある。その典型が、本論で検証した日本アルプスの山岳風景であり、瀬戸内海の多島海風景なのである。それらの美しさは、社会的に形成され、教育によって広まり受容されるようになった。そして、花が咲き乱れる草原や小高い丘の上からの展望は、風景の領域にとりこまれ、日本アルプスの山岳風景や瀬戸内海の多島海風景と同じように風景としてとらえられるようになる。

したがって、本論で設定したベルクらの仮説－「風景の美しさは、環境の中にはなく、それを見る人の内面の中にある。風景の美しさは、絵画や文学などに関わる教育により成立し、そのような教育がなければ、風景の美しさは、認識されない」は、必ずしも正しくない。

ベルクらの仮説は、風景という概念が確立された時期以降に創造された風景の美しさに限定すれば正しいといえる。しかし、実際には、たとえば花が咲き乱れる草原や小高い丘の上からの展望のように、風景という概念が確立される時期以前から存在した遺伝子レベルで美しく見える環境が風景の領域に取り込まれている中で、すべての風景の美しさが教育によるものとはいえなくなっているのである。

さらに、「風景の美しさは、環境の中にはなく、それを見る人の内面の中にある」という部分も人の遺伝子に作用して美しく見える風景があるのだとすれば、間違っている可能性がある。この部分に関する考察は、「研究の方法」のところでも前述したので省略する。

前報ならびに本論の冒頭で述べたように、風景は、客体視して視覚的に知覚した環境にそれを見る人の内面が生成する主観が融合することにより環境の中に立ち現れるものである。だが、ベルクが指摘するように、私たちが、現実(環境)をあるがままに客観的にとらえられるという誤解をしているために、風景の中に錯覚が生じることになる。ベルクは、その原因を私たちが風景を認識するときそこに主観が入り込みそれが客観的なもの、つまり環境のビジュアルティと合成

されることにあるとする。結果として、風景の美しさは、環境の中にはなく、それを見る人の内面の中にあるにもかかわらず、それが環境の中にあるように感じられるのだ。これがベルクの考え方である。だが現実には、今日私たちが風景として認識する環境の中には、ヒトの遺伝子に作用して美しく見える環境が混在している可能性が高い。そのような風景においては、その美しさは、少なくとも私たちの内面には所在しない。その美しさは、環境が私たちの遺伝子に作用して生じているのである。

以上のように、風景の美しさの中には、教育的な要素と遺伝子レベルの要素が混在している。風景の美しさは、複雑でややこしいものなのだ。

[引用文献]

- 1) 竹田直樹(2016) 柄谷行人(1941-)の言説を題材にした「風景の発見」に関する考察, 景観園芸研究, 18, 1-9
- 2) ルソー, 安土正夫訳(1986) 新エロイズ(三), 岩波書店
- 3) 柄谷行人(2004) 日本近代文学の起源, 岩波書店
- 4) サイモン・シャーマ, 高山宏, 梅正行訳(2005) 風景と記憶, 河出書房新社, 21
- 5) オギュスタン・ベルク, 篠田勝英訳(1990) 日本の風景・西欧の景観－そして造景の時代, 講談社, 40-58.
- 6) 前掲書 5)
- 7) 前掲書 5)
- 8) 柳田国男(1962) 風景の成長, 定本柳田国男集第二巻, 筑摩書房, 406-416
- 9) 中村良夫(1982) 風景学入門, 中公新書
- 10) 上野洋三編(2008) 笈の小文・更科紀行・嵯峨日記, 和泉書房, 53
- 11) 小島鳥水(1912) 日本アルプス 第1巻, 前川文栄閣
- 12) 瓜田澄夫(2006) ピクチャレスク美学における山岳表象について, 神戸大学国際コミュニケーションセンター論集 3, 93-105
- 13) 前掲書 12)
- 15) 前掲書 12)
- 15) 前掲書 12)
- 16) エドモンド・バーグ, 中野好之訳(1999) 崇高と美の観念の起原, みすず書房
- 17) 前掲書 2)
- 18) ゲーテ, 相良守峰訳(1960) イタリア紀行, 岩波文庫(赤 405-9)
- 19) 西田正憲(1996) 近代の欧米人による瀬戸内海の風景の賞賛, ランドスケープ研究 59(4), 298-309

- 20) 西田正憲（1994）明治後期における瀬戸内海の近代的風景の発見と定着, ランドスケープ研究 58(2), 211-217
- 21) 南井正廣（編）（2004）ウィリアム・ギルピン『ピクチャレスク旅行記および関連著作・評伝』復刻集成, ユーリカ・プレス
- 22) 高山宏（1995）庭の綺想学—近代西欧とピクチャレスク美学, ありな書房, 129-284
- 23) 前掲書 22)
- 24) 前掲書 21)
- 25) 石倉和佳（2005）「ピクチャレスク」時代—イギリス 18 世紀における『リリカル・バラッズ』, 兵庫県立大学環境人間学部研究報告 7, 213-223
- 26) 前掲書 26)
- 27) 藤田治彦（1989）風景面の光—ランドスケープ・ヨーロッパ・美の掠奪, 講談社
- 28) シーボルト, 中井晶夫・斉藤信訳（1978）シーボルト『日本』第 2 巻, 雄松堂書店, 366.
- 29) 前掲書 19)
- 30) 長谷川真理子（1992）クジャクの雄はなぜ美しい?, 紀伊国屋書店
- 31) ヘレナ・クローニン, 長谷川真理子訳（1994）性選択と利他行動—クジャクとアリの進化論, 工作舎, 164-174.
- 32) クリストファー・アレグザンダー, 平田翰那訳（1984）パターン・ランゲージ—環境設計の手引き, 165.
- 33) コンラート・ローレンツ, 日高敏隆訳（1980）ソロモンの指輪—動物行動学入門, 早川書房, 206.
- 34) ジェイ・アプトン, 菅野弘久訳（2005）風景の経験—景観の美について, 法政大学出版局, 77-85
- 35) 樋口忠彦（1993）日本の景観, 筑摩書房, 146-152.
- 36) テンプル・グランディン, 中尾ゆかり訳（2006）動物感覚—アニマル・マインドを読み解く, 日本放送出版協会, 60-66.
- 37) 伊谷純一郎（2006）原野と森の思想—フィールド人類学への誘い, 岩波書店, 27-34.
- 38) 前掲書 37)
- 39) 宮地伝三郎（1974）サルの話, 岩波書店, 23-34.
- 40) ウィリアム・C・マックグルー, 西田利貞監訳, 足田薫・鈴木滋訳（1996）文化の起源をさぐる—チンパンジーの物質文化, 中山書店, 334.

【摘要】

本論では、オギュスタン・ベルクらの言説に基づき、「風景の美しさは、環境の中にはなく、それを見る人の内面の中にある。風景の美しさは、絵画や文学などに関わる教育により成立し、そのような教育がなければ、風景の美しさ

は、認識されない」という仮説を設定した。しかし、ベルクらの仮説に基づき風景の美しさを表現しようとすると、違和感が生じる。この違和感の原因は、教育によって成立する風景の美しさとは別に、人間が遺伝子レベルで、いわば本能的にポジティブに認識する環境が存在するのではないかという疑問である。

そこで、本論では、ベルクらの仮説に沿う、教育により美しく見える風景の典型的な事例と遺伝子レベルで美しく見える環境の典型的な事例をそれぞれ二つずつ提示して、考察を行うことにした。それぞれの典型的な事例の分析は、既往の研究を活用した。

結果として、ベルクらの仮説は、風景という概念が確立された時期以降に創造された風景の美しさに限定すれば正しいといえることがわかった。しかし、実際には、たとえば花が咲き乱れる草原や小高い丘の上からの展望のように、風景という概念が確立される時期以前から存在した遺伝子レベルで美しく見える環境が風景の領域に取り込まれている中で、すべての風景の美しさが教育によるものだとはいえなくなっており、この点に関し、ベルクらの仮説はまちがっている。